松波むかし語り　ここに住み続けて　その47

今回のお客様

税務事務所経営のかたわら花壇を丹精する

須藤（すどう）　信一（しんいち）さん　61歳　1丁目

“通りの花壇ですか？　花を植えれば、空きカンも捨てにくくなると思って……！”

須藤さんは税理士、お父さんから引き継いだ須藤事務所の２代目として仕事をする一方、家の屋上やフェンス、それに市の街路建設課から許可を得て、家の前の通りに沿った50坪ほどの花壇を丹精するという別の顔を持っています。「クレマチスやバラといったつる系は主人、種まき系は私」というご夫婦の分担がなされているというのが奥様の弁ですが、須藤さんは「私はもっぱら草むしりです」と謙遜します。

「花壇づくりは、このあたりも共同住宅が増えて誰が住んでいるか見えにくくなっていますし、通りを草ぼうぼうにすれば空きカンなどの不法投棄が増えます。それなら雑草が生えないよう手入れをして花を植えれば、空きカンも捨てにくくなるでしょうし、人の目を楽しませることもできると思ったからです」。「タネから咲く花を想像して、植え方を工夫するのも楽しいですしね」と須藤さんはうれしそうに語ります。

須藤さんが土いじりに関心を持つのは、子どもの頃の体験を引きずっているからでしょうか。稲毛の浅間神社の裏手で生まれた須藤さんは、5歳の時に松波に越して来ました。「家数が少ない稲毛と違って、たくさんの同世代の子どもと遊べるのがうれしかったですね。まだこのあたりには竹やぶや草むらがあってそこに陣地を作ったり、カブト虫のいる木や小山でよく遊びました」。「じつは稲毛の幼稚園と、それから大学も法学部を卒業してから資格を取るために編入した経済学部も中退しましたから、学校の最初と最後が中退という“学歴”がずっと引っかかっていたんです」という須藤さん、一念発起し千葉大の大学院に入り直して修士号を手にしました。

“老人力”という言葉をうかがいました。「悪いことは覚えてない、くよくよしない、目は近くも遠くもよく見えなくなるから女性はぜんぶ美人に見える、これは年寄りのメリットだと思うのですね」、税務の仕事をするようになってものにこだわらなくなったという須藤さん、「まっ、いいか！」と思うことも多くなったと語ります。

街の環境美化に貢献のひととき

父が去年、82歳で税理士を業務廃止したんです。税務事務は毎年制度が変わりますから現役を続けるのはたいへんですが、父には生涯現役でいて欲しかったと今も思います。同業の税理士などを見ていると、一つの目安は70歳、そこでまず事務所の承継を考えるようです」。学生時代、卓球クラブに所属していた須藤さん、去年からまた週に一度、卓球センターに通い始めたほか、朝６時から１時間の愛犬の散歩を日課にしています。須藤さんなら生涯現役を続けられるかも知れません。

魚屋や肉屋、八百屋など、松波では商店が成り立たなくなって、しだいに姿を消しています。「この町も買い物難民に近い人が生れています。町の中に長く続くお店があってほしいと思うのです」。松波を愛し、この町の将来を気づかう須藤さんです。